

〈研究ノート〉

芸術の一つとして考えられた幸福

— レーモン・ポランの哲学 —

白石正樹

目次

はじめに

一 審美的価値

二 思い出の傑作

三 幸福の観想

はじめに

ポランはこれまでに次のことを認めた。— 幸福は一つの倫理的価値でないし、われわれが生きている世界と両立しうる単なる技術的価値でもない。探求の歩みごとに、それは現代の人間にとって不条理で意味を奪われたもののように、あるいは実現しがたく不可能ですらあるもののように思われた。そのわけは、われわれの世界は、われわれがその分析をいかなる次元に位置づけようとも、われわれの信念にとっても、知識にとっても、希望にとっても、それがわれわれの幸福にとって十分な準拠体系として役立つほどに十分永続的な、普遍的または正統的な秩序を伴わないからである。

いかなる存在論的秩序に、われわれは自分の幸福を依存させるのだろうか。— 「存在」(être)の語がわれわれにとって徐々にその影響力を奪われたときに、そして実際われわれが諸々の現象の世界に、諸々の意義の宇宙にしかもはや生きていないときに、そしてどんな一貫性のある真理も、つねに偽って独断的でもなく空虚な存在論的真理よりも、多くの意味と効果をもつときに。

科学自体も、約定によって立てられたその言語のなかで、意味に満ちた世界の秩序をわれわれに発見することはない。それはわれわれに現実について、測

定の体系に基づき技術的効率をめざす、抽象的で約定的なイメージしか与えない。そして後者（技術的効率）は測定がその最初の表明であった、実験の最終的表明以外のものではない。それは称賛すべき効率の言語を形成する。しかしながら、それはその時以来、幸福というまったく人間的な問題の前にわれわれを打ち棄てている。われわれはそのことをカントの時から知っている。科学が打ち立てる事物の配置は、何故にそれらがこのように存在するのか、それらの目的は何であるか、またわれわれの目的は何であるかを、われわれに明かさない。自由な諸存在であるわれわれの実存の意味は、それが何であれ、またそれがどこから由来するのであれ、自然の構造から独立したままである。

科学はたんに一つの道具である。われわれが自然について抱くイメージ、われわれが科学のおかげで、科学と同時に構成するイメージは、手段のイメージ、生活の条件のイメージである。科学と自然は技術として考察される。それらは事物の様態 (le comment) にしかかかわらない。かかる手段の宇宙は、価値や善や幸福に対して、人間にとって根本的に意味を欠いていると言ってもいいくらいである。極限的には、自然科学として理解されるような狭い意味での科学は、人間を対象とするときでさえ、巨視的次元で、または統計的次元で、彼においてその存在の外的表れ以外のものを考察するということを、そしてそれは人間において本来的に人間的であるものをいつか本当に語るということ、ひとは容易に否認しうるだろう。科学の宇宙は、人間が近似的認識の規則または確率的認識の規則にしたがって、称賛すべき厳密さで語ることできる宇宙である。しかし、そこにおいて彼は個人的に生きているのではなく、そこにおいて彼の生活は正当化されることも非難されることもありえず、かつその宇宙は、彼に自分の存在に対しても、自分の行動に対しても、自分の幸福に対しても、理由も目的も与えない。

ひとは歴史のなかに一つの生成の秩序を提案するだろうか。しかし、そのとき無際限に延長された歴史の終り (une fin de l'histoire) のあの回顧的ビジョンと組み合わせられた、歴史の意味 (un sens de l'histoire) の神話は、それらが両方とも立証できない仮説の成果であるかぎり、どういう意味があるのか。歴史の単一性 (l'unicité de l'histoire) の主題は、たんなる話し方 (言葉の綾) になった。— われわれは可死的で (mortels) 一貫性を欠いた、複数の意味で

の歴史を生きている。そしてわれわれの努力は、われわれのなかの各々にとって、それら（複数の意味での歴史）との関係でまったく多様な意図をもちうる。あるいはそうした努力は、われわれがかかわった個別的歴史を勝利させ、かつそれを普遍的なものにする傾向がある、あるいはそれをより調和的で、より一貫したもの、またはより理解しやすいものにする傾向がある、あるいはより緊密にその発達に参加する傾向がある、あるいはそれをわれわれの個人的影響力で十分特徴づけるか、あるいはまたその流れを維持するか、あるいは変形し、その流れをひっくり返しさえする傾向がある。われわれはまだ、われわれの行動が効果的か、またはわれわれの自覚的な計画に一致した結果を伴うか、決して確実でない。基本的に所与の、生成のうちにある秩序を欠いているので、われわれは、諸々の歴史が個人としてのわれわれや集団としてのわれわれに依存するのと同じくらい、われわれがそれらに依存するところの、生成のうちにある諸々の歴史において生きる。われわれがたいそう活発に、しばしばたいそう盲目的に参加する、あの諸々の歴史の闘争——しかもそれはチャンスがたいそう大きな位置を占める、終りなき闘争であるが——において、それゆえ、どこに永続的で正統的な、われわれの幸福の開花にとってたいそう必要な、全面的な準拠の秩序 (*l'ordre de référence*) を見出すべきだろうか。

普遍的で永遠なる正義の秩序は、われわれの理解を越えている。明白なヒエラルキーを欠いた人々の間において、人間的正義はまさにわれわれの最高の努力の対象でありうる。それはなおも一層しばしば、その揺れ動く相対性において、その不完全性自体において、論争の機会であり、その論争を、誠実には折り合えない諸々の観点の対決が、信条も法律もない闘争と同様に、果てしなく仕組んだり解決したりする。そのためにわれわれが熟考し取り組み闘う、理解可能で決定的な普遍的正義の状態は、われわれにとって、永遠の幸福が自らの救済を求めた人々に果たしたのと同じの、神話の役割を果たす。歴史の終りという用語で思考するやいなや、人間は終末論的観点を免れない。

要するに、何人ももはやルソーの次のようなアフォリズム（格言）に賛成しなくなってからかなりの時が経っている。——「若い人の教育の目的は何か。それは彼を幸福にすることである。この原則には議論の余地がない。」おそらくある人々は、幼年期における未来の大人を尊敬するかわりに、子供たちにおける

幼年期を崇拜しつつ、ときどき教育のさまざまな段階で留意すべき、子供の幸福 (bonheur enfantin) の神話に捕われていた。— 大人の生活への入門が必然的に伴う困難なまたはつらいあらゆる試練を無視してである。しかし、誰が前もって、あらゆる教育が必然的にその準備に捧げられる、大人の幸福 — 私がいうのは幸福であって安楽ではない — にあえて一つの意味を与えるだろうか。共通の幸福も、幸福の共通尺度も存在しないので、各人にとっての尺度に基づいて幸福の学校を組織しなければならないだろう。しかし、ひとは予見できないことに対して、またユニークなことに対して教育しないし、自分一人にしか決して依存しないことに手ほどきをしない。教育によってさえも、ひとは他の人々をかれらに代って幸福にすることはできないし、ましてやかれらの意志に反してそうすることはできない。幸福への教育において、教育者は自分を、武器 (手段) を欠いていると感じると同様、目標を欠いていると感じる。逆説的ではあるが、幸福への最良の教育は、諦め、断念、禁欲への教育であろう。— それは不幸に対する教育であろう。[出典：R. Polin, *Le Bonheur considéré comme l'un des beaux-arts*, PUF, 1965, ch. III.]

一 審美的価値

幸福の語は、しかしながら、われわれの言語から消されるべき語、われわれの理想や欲望から追放されるべき価値、であろうか。われわれはそれを信じることをやめたが、われわれはそれを考えたり、それについて語ったりするのをやめなかった。われわれはこれまで、幸福に対して満足のいく地位を見出さなかった。— しかしながら、それは除去されうるだろうか、そうされるべきだろうか。

われわれには探求されるべき最後の領域が残っているが、それをわれわれはこれまで探求しようと考えなかった。昔の人々がそこに生きていと信じていた調和的世界の中で、かれらの道徳的生活の最終目的をなしていた価値を、その最後の領域に探求することは、それほどわれわれにとって逆説的であるように思われたのである。しかし、幸福の基本的条件をなすものは調和ではないか。それを倫理的価値または技術的価値とすることを受入れなければ、われわれに

は幸福を芸術の領域 (le domaine des beaux-arts) におき、それを審美的諸価値 (valeurs esthétiques) のうちの最も普遍的なものとして扱うことが残されている。いかなる自然的善性ももうその調和を押しつけることのない世界に生きているので、われわれはあたかももう芸術の空想的世界のなかにしか、終りなき究極目的 (finalité sans fin) としてついに認識された、われわれの存在の究極目的を想起することができないかのようである。美は、スタンダール (Stendhal) の言葉によれば「幸福の約束」ではないか。美なきところに幸福はない。存在論的調和がないので、基本的に調和にして調和の享受である幸福は、もはや何らかの美しいアートによって想像された空想的調和に対してしか意味をもちえない。

われわれは審美的価値によって、創造された価値を意味する。— それなしでは、所与の現実の実際ので効果的ないかなる変化も、直接、結果として起ることはない。しかし、それは、それを理解できる人々には、感覚で捉えられる世界の変容、変質と、他者とともに事物の調和的な新しい表象に参加する可能性とをもたらす。審美的創造は、規範にも行動にも帰着しない。しかし、審美的創造がそれによって秩序づけられる調和的世界がどんなに非現実的であろうとも、かかる世界は想像上の諸存在の比類のない可能性を提供する。後者なくして生は生きられる労苦に値しないだろうし、ともかく後者なくして、生はおそらく人間的意味をもつのをやめるだろう。このことは結局、次のように言うのと同じである。— 幸福は自然的な生物学的欲求にも行動の要請にも対応しない。それは現実の秩序に属するのではなく、われわれが自分自身と世界とで描き上げる感覚的表象の秩序に属している。それはわれわれが、われわれ自身とその歴史について保たれるイメージとの一致において追い求める、あの内的真理の秩序に属している。幸福を審美的価値とすることは、だから、その重要性を無視することでなく、行動の埒外で、義務の埒外で、それを己自身による人間の表現と自覚の手段の一つとすることである。— それは本質的に感情的な表現と自覚であるが、それらの純粹さによって値打ちがある。幸福は、人間的に体験されうる最も満足した、最も調和的な、そして最も完成した自己理解である。

われわれは、どうして技術的な製造や変形が、現実の非人間的な無秩序や人間の諸価値に対する乗り越えがたい不適合を除去するに十分なだけ、決して現

実を修正するに至らなかったのかを見てきた。また、どうして基本的秩序を欠いた世界のなかで、自由に対して認められた力が、人間に幸福以外の他のものを求めるように促したのかを見てきた。その反対に、幸福に必要な調和は芸術的創造の所産でありうる。なぜなら、芸術は現実をその無秩序から解放するのに十分なだけ、現実を変形しうるから。また実際に体験される審美的喜びを発生させるのに十分なだけ、間近でそれに従いうるから。

マックス・シェーラー (Max Scheler, 1874 - 1928) が、感覚的生の芸術家によって選択され組織された生活を理解していた仕方、または『地の糧』 (*Nourritures terrestres*) のジッド的愛好家 (amateur gidien) の仕方、快樂主義の一種の審美的復活によって、生活を実際に一つの芸術作品に変える必要はない。いろいろな理由で、もっともみな型通りの理由で、そうである。

一方において、幸福は実現されるべき作品、未来のための計画 — われわれがすでにその無意味を認めたこと — へと再び変えられていたから。他方において、体験された唯美主義 (esthétisme) は、感覚的調和の表象の様式に従って実際に生きようとするあの努力を耐えがたいものにする内的矛盾を伴うから。ユイスマンス (Joris-Karl Huysmans, 1848 - 1907) の作品の表題が述べていたように、「さかしま」 (à rebours) で、ひとは長く生きないし、ひとは永続的な幸福をきずくことはない。唯美主義のうちでひとが現実生活にアクセントをおくか、それとも表象にアクセントをおくかに従って、唯美主義は速やかな失敗、または誰もだまされない喜劇になる運命にある。さらに、シェーラーまたジッドにとっては、芸術作品の構築の中にとりよりも、文字通り審美的実行のうちに、すなわちわれわれがすでに幸福の探求の中でそのいかんともし難い不十分さを求めた技術のうちに、幸福を求めることが必要である。

極限的には、欲望の満足からでなく、欲望それ自体の現前から、最高の享樂を引き出さねばならない。「私が知ったこの世で最も美しいことは、私の飢えであり、私の渇きである。」実際、どれほどの「情熱」、どれほどの高揚が、自分を過信するために、そして出口のないこの道で幸福の苛酷な掟を忘れるために必要なことだろう。

ひとは享樂の技術に凝り、ひとは喜びをおぼえるために繊細な方法をやしなう。 — 調和はそれが前もって原則としておかれた場合にしか、終りに見出され

ないことを忘れつつ。「私の幸福は情熱からつくられる。区別なくあらゆることを通して、私は激しく熱愛した」とジッドは書いている。この「無区別」(indistinction)の脅威に打ち勝つために、彼は各瞬間を分離して、それに「急に幸福のあらゆる特性を集中させる」ように、それを孤立した喜びの全体性にしようと努めている。基本的調和を欠いているので、ひとはその時代の実践的要請を考慮せずに、副次的生活のなかに自らの人工的楽園を閉じ込めざるを得ず、ジッド的ディレクタントイズムの無秩序と混乱に陥る。あるいは、ひとはシェラーとともに、愉快と不愉快の価値の劣った地位、感覚的喜びの不十分さと貧しさ — ひとが現実構築すると主張する幸福の、至高にして十分な性格と両立しないこと — を認める羽目に陥る。無秩序が与えられるとき、または秩序がつねに補うべきかやり直すべきかであるとき、幸福の完成は想像力のみ依存し、現実の選択ないし変化に依存しない。

幸福のアートは、それが可能である者にとっては、自分自身の過去に関する一つの瞑想 (méitation) である。幸福は永遠性を要求するものであって、つねに消え失せる現在の不安定のなかにも、未来の不確実な事柄のなかにも、意味を見出さない。しかし、われわれの過去の幸福な時々の思い出 (souvenir) を、それらに貴重な永続的な芸術作品の形式を与えつつ、再構成し擁護することはわれわれに属している。そのときのみ幸福は、われわれの諸価値の秩序と、かつて体験され、その後は堅固な、諸満足の現実との間の、ついに確立された一致につづくことができる。

それは保存の本能、生きる意志、自己愛だろうか。われわれの悪しき思い出は、不機嫌と同様に、おのずから除去される傾向がある。 — つきまとう呵責や後悔を引き起すために、疑悩の趣味 (le goût du scrupule)、不幸の魅惑、または自分自身を苦しませる欲望がそれに混合されないときに。あたかも各思い出は、それがわれわれにとってより不愉快であるか、より辛くより屈辱的でより恥ずかしいように思われるだけ、一層重い負荷を充てられたかのようであり、また、あたかもそれはこうして、忘却の深さのなかへそれだけ一層下に落ちるかのようである。このような上澄み移し (décantation) は自然的で自発的である。ある出来事の思い出までも、それ自体、上澄みを移し取らないものはない、また何らかの浄化の移し変えを被らないものはない。結局、ひとは思い出すの

だから、最悪のことは避けられたということである。そのときの苦悶は、それに置き代った安堵とそれにつづく多幸症 (elation) 以外の他の痕跡を残さない傾向がある。危機または劇的事件の時期は強く生きた時代の熱をもち続け、ひとがそれに喜びを見出す自己の回顧的な満足を放射する傾向がある。あるいはひとは、強く感じていたこと、普通何らかのユーモアを引き起すこと、に対して距離をおく。

困難な時代の思い出は、体験された苦痛や悲慘の思い出からしばしば浄化されていること、そしてもはやほとんど快く励ましとなる時々の刻印しか保たない傾向があることを、われわれはみな知っている。より透明なそれらの時は、状況の連続の中ではまれであった。しかし、それらの時こそが輝き、われわれの記憶の不思議な力 (magie) を照らすのである。夜空についても同様である。——ひとは星たちしか思い出さない。それらの特権的な時以来、自然的上澄み移しのこの運動、生き生きした事物の深みからやって来たこの救助的なインスピレーション、を少しずつ追跡すること、そして、現在の意外な出来事や悲慘のなかで、われわれの避難所でないとしても、少なくともわれわれの防御と保証をなすであろう思い出の、整序された永続的な総体の形成へ参加することが、われわれの役目である。こうして、消え去る瞬間の魅力が、永続的な仕方、少なくとも変容し固定されるだろう。その最後の日々においてまで、ルソーはそうしたことを「書く行為 (エクリチュール) によって固定する」ことを望んでいた。——「私がそれらを読み返すたびに、私にその享樂がもたらされるだろう。」

われわれの思い出の永続性をもって、われわれの幸福のつねに意のままに使える永続的な秩序を構成することは、芸術家の仕事であり、詩人の仕事である。それゆえに、詩人たちは自発的にそれに専心した。こうしてロンサル (Pierre de Ronsard, 1524-1585) は、自分の心の中に、大理石の中へのように彫られた、愛が彼にもたらした美の思い出をもっている。——

そしてもし、今日、あなたのかくも完全な美が、
かつてのようでないとしても、私はそれでもなお喜ぶ。
なぜなら、私はあなたが現にそうあることでなく、
私が見た美の甘い思い出を、考慮に入れるのだから。

幸福な思い出は、彫像の変わらない晴朗な永遠性のなかに入っている。そしてミュッセ (Alfred de Musset, 1810-1857) は、シノーペー (Sinope) へのソネット (14行詩) に、幸福の時よりも幸せな思い出を好みさえしつつ、ロマンティックな反響をもたらしている。――

ダンテよ、汝はなぜ、苦悩の日々における幸せな
思い出よりも、さらに悪い悲惨はない、と言うのか。
幸せな思い出は、おそらく地上では、
幸福よりも真実である。

さらに、ひとは失わずにいる思い出からそれ (快楽の享受) を分けるとき、ひとはある快楽またはある喜びの享受の不完全な幻想に満足する。スピノザはすでに、人間は過ぎ去った事物のイメージによって、現在の事物のイメージによるのと同じ「喜び」または「悲しみ」の感情をいだく、と述べていた。

ひとは多分、さらに一歩進めることができるだろう。すべては起るが、あたかもひとはそれ以後は純粹で永続的なその快楽の思い出の中でしか、ある快楽を真に味わえないかのようなのである。――それも、その思い出が、ひとりでの過去の意図になりつつ、それが伴っていた不純で混合的で一時的なあらゆるものから解放された後で。そのとき、体験された苦痛、疲労、悲惨の思い出でさえも変質を被り、楽しみ、甘さ、優しさ、または誇りの要因で影響されるようになる。ある快楽、ある喜びの中で大事なことは、つねに消え去る現在の瞬間よりも、保存される思い出――いつも意のままに使える喜びの、いつも保持された約束――である。最も純粹な、最も確実な、最も永続的な享受は思い出のなかにある。

そのもろさ、不純さ、はかなさによって、これまで体験された真の幸福であることを妨げられていたあの「幸福の諸瞬間」までも、思い出によって変形されて幸せな回顧 (rétrospectives heureuses) のなかに位置を占めえないものはない。それらを損っていた無秩序から救出され、不易の思い出に昇格され、ついに絶えず使用できるようにされて、それらはつねにわれわれの意のままになる再編された幸福の諸要素を形成しうようになる。

自由の秩序を欠いた、そして歴史の永遠性を欠いた世界のなかに生きながら、

古代人の教訓に耳を傾けること、そしてわれわれの仕方、完全な幸福の規定に忠実なままであることは、われわれにふさわしく、かつなおも可能なことである。— もしわれわれがそうしうならば、われわれの過去の思い出をもって、われわれの生のそれであったであろう秩序の、調和的な生成を築き上げつつ。過去は永遠なるものの性質を帯びており、永遠の相の下で (*sub specie aeternitatis*) 考えられうる。しかしながら、われわれの体験された過去は、われわれに本来属している現実世界の唯一の断面であって、われわれはそれに相互的所有により結びつけられる。われわれはすっかりその中にあり、かつそれはすっかりわれわれの中にある。すべては起るが、あたかもわれわれは、われわれの思い出がそうであるような、歴史的であるがある意味では不滅のそうした材料をもって、時々回顧的に、われわれの生の秩序づけられた歴史とわれわれの諸価値の秩序との間に、永遠なもの (*éternel*) でないとしても少なくとも永続的な (*perpétuel*) 一致を築き上げることができるかのようなのである。

自我と世界の出会いにおいて、幸福は、秩序の享受、すなわち体験的だがその後は永遠的な調和の享受、である。幸福は、受取られた秩序と創造された秩序との実感された一致 (*accord*)、秩序と創造との実感された一致である。ついに調和的となった諸秩序間のかかる一致の外に、ただ一つの現実のなかにも、芸術のみのなかにも、幸福は存在しない — 古代人はわれわれにこのことを教えた。なぜなら、それはわれわれにとって、秩序と意味の創造的な回顧的幻想のなかで、体験された現実の秩序とわれわれの自由の行使とを、また所与の秩序の不変とわれわれの歴史の生成とを、一致させる唯一の手段であるから。

しかしながら、まったく審美的で回顧的なかかる満足を、つじつまの合った夢、ひとが自分自身に語る根拠のない話、現実に向かうがそれに反した幻覚 (*hallucination*) とする必要はない。

ひとが勝手に思い描いて自分自身に強いる神話は、つねに一方では錯乱に、他方では虚言におどされてひどい毒を分泌するのであり、それにはいかなる平静さも逆らえない。そして、夢想という一時的偶然に身をゆだねることは、欠如のまったく消極的な安楽しか表わさない。そのメランコリックな喜びが陰鬱でも諦めでもないためには、夢想は非現実の中にあまりにも閉じこもったままである。それは生の埒外で、効力のない欲望の妄想とあの世の妄想との間の想

像された一致という見せかけの快きをもたらす。しかしそれは、そのはかない逃避により、偽りの救助を空しく素描するところの現実的な不一致や無秩序を証拠立てている。そのとき、想像上の未来に生きるほうがまだよいだろう。夢想は詩的になるだろうし、それは夢想よりもむしろ詩であろうし、またそれは非現実的宇宙の芸術家的想像のなかで、幸福のノスタルジーを忘れることだろう。

ついに調和的に秩序づけられたわれわれの過去の回顧的幻想をなす思い出は、反対に、その堅実さとその重みを、体験された出来事のそのあらゆる官能的密度を、保つ。そのとき、想像的なものには思い出の選択とその構成の調和しか存在しない。しかし、われわれはこれからは、人間によってしか、また人間のためにしか、理解できる秩序や調和が存在しないことを知る。

古代人の中でほとんどただ一人、偶然によって支配された無秩序な世界に立ち向かったエピキュロス (Epicure) は、すでにわれわれの問題に出会い、次のように教えていた。— われわれの思い出以外何ももうわれわれの意のままにならない。そして、一つの思い出の喜びを哀惜の余波から純化しうるやいなや、ひとが思い出の中の最良のものから引き出しうる穏やかな喜び以上に深いものはもう何もない。過去の善行の思い出は、彼によれば、幸せな生活に大いに貢献する。それゆえに、完全に幸福でありうるのは、若い人でなく、立派な生 (une belle vie) を生きてその思い出を享受しうる老人である。その生涯の最後の日に、彼自身つらい苦悩に悩まされていたエピキュロスは、われわれの思い出のなかで最も純粋なもの、過去の友情の思い出、は現在の最悪の苦痛を消し去り、われわれを幸福な人にするのに十分であると書き、そう感じていた。

カサノヴァ (Casanova) がそうであったような素朴なエピキュリアンは、自分の幸福はすべてその思い出から来るということを、自分の記憶に沿って言い繰り返している。そしておそらく実際、すべての回想録作家は、かれらの「幸福」の最良のものを、かれらがついにその配列を制御しうるようになった、実際に体験された過去の調和的再構成から引き出している。

二 思い出の傑作

多分、こうした幸福の規定の自覚は、目的の新しい移転をもたらしうる。—— 幸せな思い出の回顧的選択に限定される代りに、ひとは幸せな思い出を残しうると推定される諸々の出来事の体系的探求を企てることが好都合であると想像するだろう。たしかに、こうした考察は、企てるべき行動の選択に正統にも反作用を及ぼさないわけにはいかないだろう。過ぎ去る瞬間において、また次の行動の計画において、よい思い出、容易に過去の調和のうちに統合されうる思い出を、自らに準備しようとすることは好都合である。それは実際すでに、日常的行動の細やかな配慮の一つではないか。

しかし、それは節度 (mesure) の問題である、とポランはいう。もしひとが幸せな思い出の回顧的コレクションを準備するために終始一貫して生きるならば、ひとは改めて幸福を一つの計画に変えるだろうし、昔の悪い癖に再び陥るだろうし、そして不可能な幸福の果てしない探求に戻るだろう。

幸福は制限もなく形式もない積み重ねにおける、幸せな思い出の単なる肯定的集積から生まれるのではない。それは一つの否定的行動、すなわち自分の過去の思い出の間での選択、それがもつ悪いものななかでの悪しき思い出の除去、から生まれる。—— ちょうど、最も美しい彫像はひとが寄せ集める粘土からでなく、なかなか動かないがひとが切り出す石の塊から生れるように。ひとは付加や集合によって幸福に至るのでなく、除去や純化によって幸福に至る。幸福であるためには、非常にわずかのもので十分であり、かつそれはいつも与えられている。どうしてそれ以外でありえようか。—— なぜなら、幸福は客観的条件を伴わないのであるから、なぜならそれはいつもわれわれに依存しているのであるから。しかしひとは、最もしばしば自分の幸福を、それが存在しない所に求める。ひとは、それが存在しうる所で、それを選択しそれを得ることを知らない。

思い出の傑作 (chefs-d'oeuvre du souvenir) の構築は、実際、哀惜の取消しや苦痛の忘却といった、自己の独特な制御 (une singulière maîtrise de soi) を要請する感情的技術を含意する。最良のものを保存し最悪のものを超出するために、それは思い出すアートに、各出来事と各存在を —— ひとがそれに

正統に評価しうる最高度にまで — 評価するアートを、結びつける。幸福の探求は、デカルトのように語るとすれば、「高邁」(générosité)の雰囲気の中かでしか発展しえない。それは過ぎ去ることの最良のものしかとどめず、かつ忘却を許しの威厳にまで高める。

われわれが世界について思い描く評価はすっかりわれわれに依存し、また、それをわれわれの発明になる調性 (tonalité) のなかへ移し換えるのはわれわれに属している、と信じることをひとがついに受入れるように願う。他の人々や歴史や事物を許しつつ、ひとは自分自身の平和とその未来の晴朗の道を準備する。軽蔑する快樂はそれきりであるし、その後味は、それが苦いかぎり、われわれの悲惨を増すのである。

もしひとが回復された過去の非現実のなかにこの単純な幸福を認識しさえする何らかの機会をもとうとするならば、出来事の卑小さを越えて自己を高めねばならず、つねに人々をその矮小さによってでなく、かれらが有する最良のものによって説明しようと努めねばならない。怨恨 (ressentiment) ほど自分の幸福の構築に反するものはない。もしひとが幸福であろうとするならば、ひとはだから、つねに他者を、彼が有するオリジナルなもの、ユニークなものにおいて、彼の作品が有する最も創造的で最も豊かなものにおいて、理解するように努めなければならない。理解すること、それはすでに純化し、気高くし、許すことである。自分の心を憎しみ、軽蔑、遺恨、非難の癖から解き放つことを学ばなければならない。一貫した思い出の調和の中にそれらを再統合するためには、自分のすべての力で、歴史に対して、また他の人々に対して、それらがそうであることを自分が望んでいたようではなかったことを許さねばならない。これはなおも、自分自身の調和と自分自身の一貫性を形作る最良の方法である。幸福の道は、高邁や魂の無垢を経るのである。幸福のアートは、容易さのなかで、また嘘や不正のおかげで遂行されるのではなく、困難のなかで、また高邁や寛大のおかげで遂行される。幸福は最も高貴な者のためにある。

われわれはここで、ハッピー・フュー (*happy few*) のための幸福しか語るつもりはない。(まさにそう言うべき時である。) 安楽 (*bien-être*) は集合的事柄でありうるが、幸福 (*bonheur*) は幾人かの人々の傑作である。安楽における平等は存在しうるが、幸福における平等は想像されない。かれらの過去の足

跡で、かれらの幸福の傑作を築き上げうる人々は二倍幸福である。それは多分まれな特権であるが、すべての人のための幸福が存在しないと同様に、各人のための幸福も存在しない。甘んじて幸福は特別な種類のエリートに留保されていることを認め、そしてとりわけ、幸福にすると約束しつつ他の人々をだまさないようにしなければならない。幸福の傑作は、芸術家のあらゆる作品がまれであるように、まれである。それにひとは自分のためにしかそれを遂行しえない

その調和が己の願いに合致する非現実的宇宙を詩人が創作するように、幸福な人間は一つの芸術作品を、すなわち彼が自分自身のためにそのアーティストである一つの非現実的調和を、築き上げる。幸福であることは、詩の才能 (*un don de poésie*) を予想させる。

われわれが思い出において、また芸術作品を伴侶として、生きるのを愛好するように、同じくわれわれが進んで伴侶と見なすのは、それを構成した各々の瞬間に潜在的に含まれる幸福に比例して再考され再編された、われわれの過去の歴史である。詩人、画家は、かれらの価値に一致して、感知され現前する表象の宇宙を創り出す特権をもっている。幸福の才能に恵まれた人々は、もし可能であるならば、その生の調和的歴史を築き上げるために、かれらの思い出を意のままに使用するのみである。われわれが「よい思い出を収集し」ようとするとき、その重要性を自覚しないだろうか。写真に対する近代の情念は、とくにその願いに応えたのでないか。われわれの幸福は、われわれの諸価値にしたがって選択され整理された一揃いのイメージである。われわれにとって幸福なままでありうるものは、われわれのあらゆる過去のイメージを通して、切り取られたあのフィルムの中にすっかり納まっている。それは大部分われわれに依存するが、またわれわれの晴朗や内的平和は、ほとんどすべてそれに依存してもいる。

多分、古代人の流儀での絶対的幸福は、もはや問題にならない。しかし、それが堅固であり、かくして — おそらく、それとともにわれわれ自身のうちにある最も大切なものであるが — 変化、偶然、および不運を免れうるためには、それがあらゆる侵害やあらゆる影響に対して文字通りの意味で「絶対的」であることで十分である。さらに、古代人の観点においてすら、たんに芸術作品と

して考えられたいかなる幸福も絶対的であるはずがないであろう。というのも、それはもう至高の目的と見なされないだろうから。多分、それはまた永遠的でもない。しかし、それは意識のあるわれわれの存在と同じだけの持続期間をもつのであり、それを越えては幸福も意味をもつのをやめてしまう。それは彼方を欠いた、一つの絶対である。それは全体に対してまた反して、全員に対してまた反して、ユニークな世界を形成する。そしてそれは、どんな他者とも共通点なしに、完全にわれわれのものである。——一人の芸術家の作品が彼のオリジナルな宇宙を構成し、彼にしか依存しないように。

審美的世界の非現実性は、そのうえ単なる幻覚とまったく違っている。たしかに、芸術家も、幸福な人間も、厳密にいつてかれらの芸術の宇宙に暮らすことも行動することもできない。しかし、各人が知っているように、芸術の宇宙は深く完全に現実的な情動の場、掛け値なしの喜びの場である。なぜなら、それは完全であるから、またその値段は無であるから。たしかに、それは例外的な喜びである。しかし、幸福は非現実的な調和から——すなわちわれわれの思い出をもって、非現実的であるが体験されたものである、一つの世界のよく整序されたイメージを構成する適合から——生まれた、その種の困難な喜びでつくられる。そして結局、決して消え去らない残酷な瞬間の現実か、または少しずつ私のうちに形成され作られる誠実な思い出のこやかな晴朗かでは、今日、何が一層真実であろうか。

ひとは多分、「私は幸福である」と永続的に、誠実に、かつ無意識でなく宣言しようとする、いかなる人も見出さないだろう。しかしひとは、熟慮の末、またかれらの過去が再考され再び整えられて、「私は幸福だった、とりわけこれこれの時に私は幸福だった」と認めることを誠実に受入れるであろう人々を、見出すことができる。おそらく、ひとが考える以上にそうである。かれらが体験したことを、全部、再び生きようと欲するであろう者を、ひとは何とわずしか見出さないことだろう。また、かれらの過ぎ去った生をもう一つの生と交換することを欲しないような者を、何とそれ以上に見出すことだろう。幸福はそのとき、審美的価値の、すなわち、ひとがそれを遂行しながら、実際に事物もその秩序も変えようとしないような価値の、外観を取りうる。そのわけは、それが一つの回顧的な価値に、つまりひとが自分の過去の思い出の観想のなかで

自ら自分に与える一つの光景に、なったからである。

これこそわれわれが、われわれの中にある感情的なものによってしか、またわれわれの過去に結びつけられている限りでしか、幸福に執着しない理由である。過去のみが確実であり、過去のみが安定している。幸福であるためには、われわれの過去の中に生きることを選び直さねばならない。幸福の願望はわれわれを過去に戻す。なぜなら、幸福であることを望むのは、いつもやはりわれわれの中のあまり人間的でないもの、なおも動物的な存在、すなわち自分の過去によって規定された存在であるから。しかし、われわれは過去におけるその幸福に、最も人間的な意義を与えた。というのも、われわれはそれを作品に変えられた過去の中においたのだから。ひとは幸福について過去形でしか語ることはできないが、しかしひとはそれについて過去形では語るができる。—それは古き良き時代であった、とひとは言う。幸福は、われわれの各々にとって、また多分われわれの時代のすべての人々にとって — かれらのなかの誰にとっても現在であったことは決してなしに — 過去に属している。そして、至高の幸福は、それに至るまれな人々にとって、集められた生涯の思い出が意味に満ちた一つの調和に整序されうる全生涯の光景から生まれる。

しかし、過去に生きたためにのみ、現に生きねばならないのか、とひとは言うだろう。もちろん、この反論は立て方がよくない。というのも、われわれは幸福を（さらに、どんな幸福を？）われわれの生活の目的にするのを諦めたのだから。しかしおそらく、結局、幸福とは生きたこと、そしてその思い出、よい思い出を保ったこと以外の何物でもない。あたかも過去に生きたという事実はそのみで十分なチャンスであるかのようであり、またあたかも生きているという事実はそのみで十分な価値をもつかのようである。— 過去に生きた幸福が、結局、われわれが形成しうる思い出のなかの不幸に打ち勝つために。われわれがペシミストでないこと、われわれがまったくペシミストでありえないことは明らかである。

しかし、ひとが生きることを選択しうるのでなければ、ひとが生まれることを選択しうるのでなければ、ひとはたんに過去に生きたために、生きることができないだろう。また、そうしたことは何の意味ももたない。さらに、そのときでさえ、古代人の流儀でわれわれがなおも幸福になるために生きるのでなけ

れば、幸福がなおわれわれにとってその十分な至高の目的の役割を果たすのでなければ、それはまったく真実ではないだろう。われわれにとって唯一の可能な幸福は、われわれがそれを年月を隔てて若干距離をおいて再考するとき、遂行された事柄のそれである。われわれが、しばし動かずに、終りに近づいたわれわれの生の時期を考察するとき、われわれはよくそのことに気づく。— われわれはそのとき、もうやって来ないだろうことの、これからは為されることも元の形に戻されることももうできないことの、最善しか考えない。そして、われわれにとって可能な最大の幸福は、われわれの人生の夕暮れにしか生まれることができない。事柄が終るとき、すなわちわれわれが、われわれが生きたことを、完了する何らかの事柄と見なすとき、それは生まれる。幸福を発見することができるようになるためには、かなり長く生きなければならぬ。「ミネルヴァの鳥であるふくろうが飛び立つのは、ようやく黄昏時である。」哲学の時、少なくともヘーゲルがそれに割当てた時、はまた幸福の時でもある。この偶然の一致は長い間、幸福があらゆる哲学の目的であり、その最良のものの結果である、と信じさせておくことができた。両方とも回顧的態度で、幸福と哲学は、明白な類似をもっている。しかし、後者は理論と実践、または実践の理論と理論の実践であり、それに対して前者はたんに一つの立派な芸術 (un bel art) である。われわれの諸哲学はほとんど幸福に没頭しないが、しかし哲学の実践は幸福の可能な諸形態の一つとして現われる。

三 幸福の観想

ポランによれば、幸福は省察 (réflexion) であり、省察の事柄である。その最も高い形態において、それはわれわれの生とわれわれの世界の理解可能性に関する包括的省察から生まれうる。自然に最も純粋な思い出のなかに、理解する喜びと理解された喜びの思い出が現れる。自然的事物の秩序との実感された一致、事物のなかの秩序と意味の発見、自分自身の思考と自分自身の行為との体験された一貫性、そうしたあらゆる種類のものと他のものとの一致、情愛の内的信頼、友情の自発的親和性、愛の抵抗しえない結合、その話し言葉・書き物・作品を通して獲得された他者の理解可能性、彼の宇宙観への参加、他の人々

と自分自身との一致を明かすこと、理解され見習われる喜び、自分の諸価値が承認され尊敬されるのを知る満足感、それに理解すること、理解されたこと。自分自身、一人の他人、幾人かの他の人々、すべての他の人々の間の一致のあらゆるそうした断片をもって、回顧的に詩的記憶のなかで、その才能 (don) を受取った人々によって、自分の思い出の秩序、世界の思い出の秩序、そして絶えず理解され実感されるそれらの一致が、現在における不易の幸福を伴って仕上げられうる。

それらの秩序やその調和的一致は、そのとき、世界に対して、またそのチャンスに対して体験されたわれわれの経験の真の理論を生ぜしめうる。なぜなら、それは、一つの審美的調和のうちに諸概念の秩序 — 強い意味での理論たる真のテオリア (θεωρία)、調和の観想 (contemplation d'une harmonie)、に値する対象 — を集めるからである。われわれの思い出の調和的配列の審美的経験において、体験された自己意識は、反省された概念的な自己意識へ自己超出する傾向がある。また、感覚的な調和は、意味に満ちた秩序へ、審美的ビジョンは、理解可能な理論へ自己超出する傾向がある。幸福の完全な源泉であるこのうえもなき調和は、理解可能なものの中に打ち立てられた意味に満ちた調和であろう。それは、歴史の変化で際限なく刷新されるが、各人にとって人間としての己の任務であり己の固有の作品であろう。

それを確立しつつ、人間は己の本質的使命 — それは理解しかつ理解されるおかげで生きることである — を遂行するであろう。かかる極限では、幸福は哲学的観想と合致するであろう。改めて、古代の賢人たちにとってのように、だが「能動的幸福」と「受動的幸福」の間のあらゆる区別を越えて、幸福は観想において頂点に達するだろう。もはや人間の目的ではないのだが、それは彼の〔精神的〕開花に付き添うだろう。おそらくより単純には、それはわれわれの体験したことの幸せな配列を熟考する判断にすっかりまとめられる。古代人にとってかかる観想は思考の目的であったし、それは永遠的秩序の観想であった。それに反して、われわれの幸福はたんにわれわれのものである歴史 — われわれがつくるのに十分貢献したとはいえないが — の中で、われわれがつくるのにあまりにも貢献した、一つの秩序の観想から生まれる。

われわれを最も根本的なペシミズムに移行したとか、落胆した、醒めきった、またはたんに諦めた態度を擁護したとか、同じく、すれっからのディレクショントぶることを認めたとかで、少しも非難してはならない。その反対に、悲惨、試練、苦痛でひとを困らせるに十分であるが、それ自体は乗越えられうる、悲劇に注意を払わないので、われわれは、ひとが人間存在を飾ろうと工夫をこらすところの、あのあらゆる避けられない悲劇、あのあらゆる本質的であると主張される不安の迷妄 (angoisses) から人間存在を目覚めさせようとした。私が言いたいのは、そうした種類の悲劇的なものの病的な強迫観念 (la hantise malade) からわれわれを解放せねばならないということであり、かつその悲劇的なものの特性は、われわれを避けようもなく死と向かい合わせにおくことである。というのも、それは死によってしか解決されえないから。スピノザの知恵を擁護せねばならないし、生について哲学せねばならない。

私自身にとっては、私の生のみが幸福に関係しており、私の死またはその後が続くものはそうではない。死んだことは何でもない。死はわれわれにとって何でもない、とエピキュロスは教えていた。死ぬことはしばしば大きな悲惨であるが、偶然にそうなのであって、それ自体においてではない。——長引かず、また試練のない死、それ自身のために望まれた死、急死がそれを示すように。われわれにとって大事なものは、他の人々の死であり、しばしばわれわれの不幸はほとんどすべてそれに依存する。ある人の死はその人の幸福に関係せず、たんに他の人々の幸福に関係する。だから、死は不測の事故としてしか決して幸福に関係しない。死と不幸との間に本質的結びつきはない。そのことだけで、ペシミズムは己の髑髏を落して、様相を変えるのである。

いいかえれば、人々の苦痛、悲惨、不安、心配がどんなに大きくとも、われわれはそれらを存在論的状況の表現や経験にすることを避け、またはそれらを人間性の規定のなかに入れることを避ける。人々はかれらだけで、かなり強いがまたかなり弱く、かなり巧みだがまたかなり不器用なので、かれら自身で最悪の悲惨を自らに加えたり、互いに苦しめ合い心配し合ったり、かれらがしかしながら本質的要請を伴うと主張する満足、栄光、承認——ヘーゲルが述べたような——を互いに拒み合ったり、あるいは、かれらの最も基本的な欲望が両立しないか矛盾している限り、一時的仕方では、決してそれを認めなかった

りする。おそらくかれらは同様に不幸であるが、しかしかれらの不幸は、まったく違った意味をもつ。なぜなら、かれらはその唯一の作り手 (artisans) であり、その唯一の判定者 (arbitres) であるから。不幸なキリスト者は死に関してしか決して心を開かないのに、キリスト者は自分に依存しない希望しか考えることができないのに、神を欠いた人々が自らに加える不幸は、すっかり自らに依存する。それは、人間としてのかれらの存在に本質的に起因しない。それはつねに、それを苦しむ人々によってと同様、それを加える人々によって、乗越えられうるだろうし、その現前は、かれらの行動やかれらの希望に際限なく開かれた活躍の余地を残す。

われわれはこれ以上、廃れた過去の、失われた時のノスタルジーを呼び起そうとは考えない。— われわれはそれに一つの新しい生命力と新しい若さを回復させるために、そうした時を求めに行くのではあるが。回復させねばならないのは、必然的に滅びるべき一つの生では少しもない、それは人間の全生涯のために、発見されかつ理解される時間における一種の永遠である。

われわれはむしろ、ペシミズムとオプティミズムのうわべだけの不毛の二者択一を免れようと努めるだろう。先ず最初に、われわれは今日では幸福は第二順位の価値、そしてある意味では、中古の価値になったことを認めた。歴史の考察が永遠のそれに優位を占めるとき、幸福の諸哲学の後を継いだのは、幸福の価値と両立しないかまたはそれを忘れた、自由、行動、義務といった他の価値に基づく諸哲学だった。なぜなら、もし諸価値が相互の関連でしか意味をとらず、それらの間でヒエラルキー的に整序されているならば、どんな価値も思うままに他の何らかの価値とどんなやり方でも結びつけられ調整されることはできない。幾つかの意義の間に矛盾が存在するように、幾つかの価値の間に両立不可能性、共存不可能性 (incompossibilités) がありうる。われわれが論証したように、自由の優位、または行動のそれ、または義務のそれは、一貫した態度をとるために根本的に幸福の価値の卓越した地位への統合を排除する。ひとはペシミズムを幸福の探求の、または幸福へのあらゆる憧れの、失敗の上に、つまり基本的な失望の上に、基礎づける。ひとはそれに成功することなしに、和解しがたいもの、すなわち幸福の優位と自由のそれ、または義務あるいは行動のそれを和解させようとするような脈絡のない態度を元にして、正統にペシ

ミズムを基礎づけることはできない。あのペシミズムは空しい感情のなかに自分を見失うために、混乱した思考から生まれるだろう。一方では幸福の哲学、他方では自由または行動の哲学、の間で選択しなければならぬ。

自由の哲学や行動の哲学に道をゆずるためには、幸福の諸哲学を削除しなければならない。ひとはこうして、あらゆる感傷的ペシミズムをやめさせよう、ペテン師が人間的諸情念を乱用するのを避けることができよう。自由の哲学や行動の哲学は、ひとがそれらを幸福な生の探求と混同するのをやめるやいなや、それらのあらゆる意味を取り戻す。そうした新しい諸価値は、幸福と同様に、しかし人間的な生活や人間的な要請の歴史の枠組みのなかで、人間の理論の意味に満ちた原理を形成することができる。ひとはつねに刷新される希望によって、またいつか決定的に遂行される義務によって置き換えるためにしか、次第に空っぽになりあの世の幻惑と威信に還元される希望を廃止しない。さらにまた、幸福を排除する専心とともに、ペシミズムとオプティミズムの支配的な性格が消滅する。幸福を望むこと、とりわけ永遠の幸福を望むことは、[仕事を] 企てるためにも、義務を負うためにも必要なことではない。何らかの明敏さ (lucidité)、何らかのシニスム (cynisme) で十分である。[ポランは、ひとが絶対的なものを、そしてまたそのみが基礎づける諸価値や諸真理を、放棄するにもかかわらず、己を放棄せず、また他の人々も、また行動も放棄しないことにその本質がある教説を「シニスム」と呼ぶ。]

しかし、われわれが理解するような、明敏な幻覚のない、しかし傲慢さもない合理的なシニスムは、過去による幸福と同様に、未来のための自由と肩を並べて進む。それはわれわれに、いつもあまりに人間的なわれわれの作品の区別のない思い出のなかにですらなく、われわれの思い出の傑作のなかに何らかの完成を探求することを教える。そのときにのみ、純化されたわれわれの歴史は、われわれに十分であり、われわれにしか依存しえなくなる。こうしてわれわれは、ついに他の人々との隠し事なしに幸せになりうる。たしかに、ひとは一人だけでは決して幸せでない。しかし、これは次のように言おうとすることである。— ひとは他の人々の思い出なしには決して幸せでない。解放的なシニスムなしには、ひとは再現され、復権され、許された自分の思い出の幸せな観想に達することはできないだろう。

どんな哲学者も、どんな人間も、自分の思想から幸福のあらゆる価値を除去することに決してまったく成功しなかった、とわれわれには思われたので、われわれは幸福を人間の諸価値の領域から排除しなかった。まったくその反対である。われわれはそれに現代世界の歴史的条件と両立しうる役割、そうした条件と首尾一貫する機能を与えようと試みた。— 安楽 (bien-être) の最小限の価値が問題であれ、「政治的幸福」 (bonheur politique) の最小限の条件が問題であれ、幸福の消極的諸条件に対して、その正しい場所があげられた。アングロサクソンの自由主義にその理想を借りつつ、マルクス主義者を含む近代人は、幸福の代用品 (succédané) として、平和、安全、豊富、快適、休暇、さらにウイークエンドまたは英国式の週日勤務制を与えた。— そしてわれわれは、かかるブルジョワの安楽に与えられなければならないあらゆる重要性、それを最もすみやかに最大多数に分配することに存するあらゆる重要性を認めた。貧しい人々をその窮乏から救助することや、飢えた人々をその飢えから救出することについては、それは自由の哲学や行動の哲学に属する問題であって、幸福の哲学のそれではない。

しかしとりわけ、幸福にその人間的価値の意味を維持するためには、それをなおも道徳的価値のために保持することができないので、われわれはそれを審美的価値と考えることを提案した。そして、われわれの思い出のついに調和的で理解しうるものとされた秩序を、われわれの歴史と世界や偶然との調律された出会いを、観想の対象とすることを提案した。われわれは幸福に意味を保持し、その可能な生活を擁護することを試みた。われわれは少なくとも、生きる快さでないとしても、ともかくよみがえる快さと生き残る快さを擁護したことを望むだろう。

毎日々験される生活の無秩序、不正、混乱、消散の中心に、やはり自分自身とその過去の光景の一致から生まれる内的平和のための場所がありうる。また、自分自身の歴史の思い出と調律された満足のための場所がありうる。われわれの生の目立った出来事のあの自由な選択、あの自由な評価のなかに、われわれをなおも日常的闘争の影響下に維持するような、慰めも、励ましも求めるには及ばない。しかし、ひとはそこに心の平静 (晴朗 sérénité) を見出すことができ、それは、もしひとがそれに至るならば、われわれの現在の生に関するわれ

われのあらゆる判断を変化させることができる。われわれの思い出の調和のなかで、それはなお和解 (conciliation) 以上に、融和 (réconciliation) を、すなわち出来事や他の人々との融和、幸福と自由の間のなお一層すぐれた融和をもたらず。なぜなら、このゆとり (aisance)、この全き新しいくつろぎ (aise) は、先ず第一に精神の完全な自由を表現するからである。光 (啓蒙 lumière) として広まるこの平和は、解放になる。実際、光、光る眼差しこそ、世界についてのわれわれの理解を刷新し、それを観想に変える。極限的に、こうした心の平静は、結局、スピノザが次のように言った理由を実感させるだろう。— 至福 (béatitude) は徳の報酬ではない、それは徳そのものである。

多分、現代の人間 — 彼にとってはわれわれの世界より他の世界は存在しえない — には、不易なる唯一の幸福、思い出す幸福、が残っている。しかし、行動の人間でさえも、さらに何を要求しうるだろうか。— 彼は仕事に飢えて、いつも不安定に未来への傾向をもち、いつも飽くことを知らず、いつも落ち着かず、いつも自分がそうあることに不満であり、すでに自分がなすことから解放され、自分になすべく提案する他のことに対していつも自由であるのだが。ひとは彼に、古代人の余暇、自分の過去の整理された光景の中ですっかり自分を取り戻す余暇とアート、そしてそれを楽しむ趣味以外の何を教えうるだろうか。つねに新しい目的を自分に与える以外の他の目的をもたない彼に対して、幸福の言葉において、刷新もなく作品もないあの目的 — あの余暇、あの光景、あの許しと平和 — よりも完全な何を、ひとは彼に約束することができるだろうか。

幸福は、現代の人々の生活に対して、もうその目的もその意味も与えない。回顧的に、仕上げられた諸歴史の、遂行された諸事物の、調和的晴朗のなかで、その観想が残されている。

